

## 言葉と真理

### —西洋中世の一風景—

山 崎 裕 子

私たちは普通、事実を伝える文章を正しい文章と考えている。もし事実と異なる内容を伝えるのであれば、その文章は間違っており正しい文章とは言われぬ。青空を見上げて「今日はお天気です」と言うならば事実・真実だが、「雨が降っています」と言えば事実と相違する表現となる。しかし、雨の日に部屋の中でマイクを手にして「本日は晴天なり」と言う人を見て、その話し手が嘘をついていると思う人はまずいないであろう。そのような表現を用いる場合にはマイクのテスト中であるということを殆どの人が了解事項として知っているからである。では、言葉の真理とは一体何であろうか。人びとは言葉と真理の関係をどのように受けとめ考えてきたのだろうか。西洋中世初期のラテン語世界に、それを垣間見てみよう。

#### アルクイヌス

現在欧米語で用いられている小文字は、アルファベットが使用される初めからあったのではない。当初は大文字のみで、「カロリング朝小字体」と呼ばれる小文字を導入したのは、カール大帝の宮廷学校長を務めたアルクイヌス（730頃—804、アルクインとも言う）の貢献によるものであった。大文字（マイユスクラ）は2本線の間で書かれる文字のことであり、小文字（ミーヌスクラ）は4本の線の間で書かれる文字のことである。英

語の学びはじめに、4本線の引かれたノートで筆記体の練習をしたことを懐かしく思い出す方もあるのではないだろうか。これらは、中世古文書学（パレオグラフィ）の学習第1段階で学ぶ内容であるが、古文書学に必要なとされるラテン語に接する機会が多くない日本では、余り知られていないことかも知れない。英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語をはじめとして、私たちがいわゆる横文字を筆記体で書くことができるのは、アルクイヌスのお蔭というわけである。

アルクイヌスの主著は、『文法学』であった。当時の人びとが学んだのは、文法学、修辞学、弁証論、算術、幾何学、音楽、天文学の7科であり、7科目学ぶことができない場合には、文法学を履修した。それらはアルテス・リベラーレス（自由学芸）と呼ばれ、12世紀に入って大学が成立すると、そのまま取り入れられる。現代のリベラル・アーツ、すなわち一般教養の原型である。ということは、アルクイヌスの『文法学』もいわゆる文法のみを対象としているのではなく、他の学問にもかかわっていることになる。7自由学芸はアルクイヌスにとって知恵へと到る7段階であり、知恵を愛する目的が真理や知恵自体等にあるならば、知恵への道は容易に示すことができると彼は言う。光がないと視力があっても目は見えない。この光に該当するのが教師であり、指導に際しては強くなるまでの間病人の歩調を導くがごとくにゆっくりとしたものでなければならないとか、労働なしにパンで溢れる農夫はいないなど、外国語学習にも当てはまる事柄が述べられる。しかし、教師と生徒の対話形式を取る『文法学』は、生徒の次のような発言で始まっている——「たいへん博学である先生。私たちは、哲学があらゆる徳の教師であり、哲学こそがこの世のすべての豊かさのなかにあって、その所有者を不幸にしない唯一のものだと先生が述べておられるのを、たびたび耳にしました」（拙訳、中世思想原典集成6『カロリング・ルネサンス』平凡社、1992年刊、所収）。第1部の終

わり近くでは「哲学の7つの段階」とも表現しており、アルクイヌスは言葉、聖書という極みに達し哲学という真理に到る階梯に必要な手立てと見なしているのである。

## フレデギスス

アルクイヌスと同時代人のフレデギスス (?—834) は、『無と闇の實在について』という、一見矛盾するかと思われる題名の書簡を著わした。彼はカール大帝の子息ルートヴィヒ一世の文書官で、カール大帝の要請にもとづいてこの書簡をしたためている。無が無であるように思われるとしても、無は或るものであるという主張を展開。その証明の手段の一つは三段論法である。たとえば、彼は次のように語る——「『無』は、意味のある言葉である。ところで、あらゆる表示は、それが意味するものに関係がある。このことから、〔無が〕或るものでないことはありえないということが再び論証される。」続いて、以下のようにも言う——「同様に、別の証明がある。あらゆる表示は存在するものの表示である。ところで、無は或るものを表示する。したがって、無は存在するものの表示、すなわち実在するものの表示である」(拙訳、『カロリング・ルネサンス』所収)。フレデギススは、このような理性による証明と並んで、闇の存在を証明するために聖書を検討する。「そして、闇が深淵の面(おもて)にあった」(創世記 1・2) という聖句を引いて、「闇が実在していなかったならば、どのような論理によって『あった』と言われるのか」と語る。ものと名称とは対応しており、闇という名称のあることが闇の存在を意味すると考えているのである。

このような論法・考え方は、無や闇が否定概念であることから生ずるアンティノミー(二律背反)である。無とは存在しないことであるが、無が

名辞であることを認めると意味を有し、或るものということになり、無ではなくなる。他方、無という言葉はある。ここに、「否定概念の妙」が生ずる。しかし、闇を「光の欠如」「光の不在」と言うのに対して、光を「闇の欠如」「闇の不在」と呼ばないことを考えるならば、フレデギスは言葉を字義的に捉えすぎたと言うべきであろう。

## アンセルムス

アンセルムス (1033—1109) は北イタリア生まれのベネディクト会士で、ノルマンディーのル・ベックで修道院長を務めた後、カンタベリの大司教に就任した人物である。イタリア、フランス、イギリスに軌跡を残す彼の人生は、まさに中世という時代の国際性を示すものであろう。「国際語」であるラテン語がそれを支えていたとも言える。彼は『真理論』という本を著わし、表示の真理と命題の真理についても言及した。在るものを「在る」、ないものを「ない」と表示する時に命題は真であるが、ないものを「在る」と表示する時にもその命題は真であるというのがその主旨である。前者は誰でも納得できるが、後者には疑問を感ずるのが一般的であろう。アンセルムスはなぜ、ないものを「在る」と表示することが真であると考えたのか。

私たちが前者を正しい命題と見なすのは、表示する目的に適って表示がなされているからである。しかし、アンセルムスによればもう一つの真理があり、表示する力を与えられていて表示すべきものを表示する時もまた真なのである。換言すると、ないものを「在る」と表示する時には表示する力を与えられて表示しているのであるから真であり、ないものを「ない」と表示する時には、表示する力を与えられていて表示するのに加えて、その表示の目的通りに表示しているから真、つまり二重の意味で真で

あることになる。さらに言い換えるならば、命題は何かを表示する限りにおいて常に「意味の真理」を有し、他方、現実と合致した内容を表示する時に「関係の真理」を有するのである。アンセルムスのこの見解は神と人間との関係を前提とし、人間が神から与えられて受け取ったものを本性的に宿していることが、命題の真理を考える際の出発点となっている。哲学的に表現すると、真理の分有の考え方が思想の根底にある。

### ラテン語と中世初期

「中世前半は西洋史上でもっとも史料の少ない時代で、このころが暗黒時代といわれるのは、文化がないのではなくして史料がないからだという者もある」と兼岩正夫氏は述べている（『ルネサンスとしての中世——ラテン中世の歴史と言語』筑摩書房、1992年刊）。とはいえ、「カール大帝の時代は、相当に史料が残っていて、このころ生きた人びとについてはある程度具体的にその像を知ることができる」（兼岩正夫『同』）。そこで、カロリング朝時代から2名、11世紀から1名を選び、言葉と真理についてごく大ざっぱに概観してみた。現代の私たちから見ると奇異に思える解釈も、その当時にとっては、時代背景を色濃く反映するごく自然の内容である。人はどの時代に属していても、「その時代の子」であらざるをえない。

中世初期において、「教養人」とは「ラテン語のできる人」のことであった。中世初期はラテン語と自国語の二言語世界であり、ラテン語は一般の人びとにとって外国語もどきであったに違いない。序の中で、「西洋中世初期のラテン語世界」と表現した所以（ゆえん）である。私たちが外国語を学ぶのと同じ様に当時の人びともラテン語を学んだのであろうが、ラテン語は教会の中では共通語であり、さしずめ今日の英語に相当したのではないだろうか。もし違いがあるとすれば、ラテン語の方が英語に比べて

はるかに語尾変化が多く習得が難しいということであろう。

## そして最後に

ここまでは哲学思想的な側面からラテン語について書いてきたが、ラテン語学習について少しく述べてみたい。ラテン語は、最近ではカルチャーセンターの講座に含まれることもあり、学ぶ機会が徐々に増えつつある。しかし古典語なるが故に、学び方は耳から聞く方式ではない点で他の外国語学習と異なる。筆者は大学2年生の時、週1回全学共通のラテン語クラス（卒業単位に充当されない第3外国語扱い）に出席したが、1年後のクラスの目標は「辞書が引けるようになること」であった。動詞をはじめ名詞、形容詞等の語尾変化が甚だしく、元の形を見い出すのが難しいためである。しかし、逆もまた真なりで、ラテン語では動詞の語尾から主語を類推できるため、強調する時以外には主語を省略できるという利点もある。語尾変化を覚えるのは難しく、変化表を何度もパラパラとめくる時がしばし続いた。ようやく辞書が引けるようになっても、現代語と異なり一語の含む意味が余りにも多いので、文章を訳す際には単語ごとに定規やしおりをはさみ単語間の関連を求めるといふ、やたらに時間ばかり要する作業(!)を繰り返すことも多かった。そのような苦勞をして何がおもしろいのかと思われるかもしれない。一つには、全容がまだ余り知られていない西洋中世の世界に接することができる点が挙げられる。日本はまれに見る翻訳文化の国であるが、ラテン語の領域は途上の段階にある。また、多くの学問分野で専門用語にラテン語が用いられている。そのため「いやいやながら学習しなければならない」という状況に置かれる場合もある。現代語の語源としての意味合いも有する。そして、或る人は「老後の楽しみのため」と称して学んでいたのであるが、その人のことを若年寄りなどと笑

うことなかれ。欧米に行きほんの少しでもラテン語ができると、「教養人」として遇してもらえることであろう。すなわち西洋では、中世の世界が現代でも息づいているのである。